地質ニュース508号，6頁，1996年12月
Chishitsu News no.508, p.6, December, 1996

—巻頭エッセイ—

知識と知恵・労働と研究

中　尾　征　三[1)]

知識(knowledge)と知恵(wisdom)は似て非なるものだといわれる．確かに，いくら多くの知識をもっていても，ただ知っているだけでは，単なる物知りにすぎない．辞書をひけばすむことを覚えるために貴重な時間を費やす必要はない．

一方，知恵の根底には必ず一定の知識がある．幼児がクルクルと眼を輝かせて，それまでになかった言動を見せると，周囲の大人は，「知恵がついた」といって喜ぶ．それは幼児が新たに獲得した知識を消化して，自前のエネルギーを生み出した証拠だからである．知識のおよばない所に知恵は生じない．

私は，約10年前に廊下や階段の電灯を二つのスイッチで点滅できる仕組みに興味をもったことがある．最初は，スイッチの機能をon-off(すなわち回路を繋ぐか切るか)に限定して考えたので，どうしても妙案が浮かばなかった．しかし，二つのスイッチの間を二本の電線で繋ぎ，どちらかのスイッチを作動させると，on-offではなくて，どちらかの電線に繋がるようにしておく(すなわち両立のスイッチを用いる)と，見事に解決できることに気づいた．

ところが，同じ考え方では，三つのスイッチで一つの電灯を自在に点滅させることはできない．おそらく前者の場合にも，もっと高級な機能を備えた部品が使われているのであろうが，私の浅知恵ならぬ浅知識では歯が立たない．

知識は，いわば個別の情報である．現代風にいえば，有用な情報のネットワークが知恵を生み出す原動力であるということになる．その意味で，知識と知恵は異なるものではあるが，決して無縁のものではない．

ところで，我々の研究という活動は，単に知識あるいは情報を寄せ集めることだけでは成立しない．肉体的・精神的にいくら大変な労働を積み重ねて，データを出し，情報を集めても，また，それらが多少加工されても，それがそのまま研究の成果(論文)になるわけではない．

似たような方法で，次々と機械的にデータをだし，似たような方法でデータ処理を行って論文まがいのレポートを書く人は，研究者とはいえず，“研究工”というべきなのだと，聞いたことがある．

また，論文と銘打っていて，確かに本人のオリジナルのデータが入っているにも関わらず，自他の過去の論文の引用が大半を占めたり，他人の業績の引用なのか，それらに基づいた本人の見解なのかが区別しにくいような表現が頻繁に現れる論文を書く人もいる．

最近は，研究者の業績評価の尺度として論文の数，それも学会の機関紙に掲載された原著論文の数が最も重要なものとされる傾向に拍車がかかったように思う．さらに国際的な学術雑誌や被引用回数の多い論文の数などが，個人のみならず，各機関の研究所としての格付け，あるいは費用対効果の評価尺度としてもてはやされているように思う．

確かに，論文を書くことは研究者の大事な使命である．しかし，極端にいえば，“研究工”的労働によって短時間に数多くの“論文”が書ける研究分野と，そうでない分野がある．また，逆にデータの集積自体が非常に大きな価値を有する分野もある．

地質学・地球科学の分野において，他の分野と同じ基準で論文の数を競うことになれば，論文まがいのものが増えることは間違いないし，そのために，研究者の貴重な時間が浪費されることもありうる．

知識と知恵の場合に比べて，論文と“似て非なるもの”との区別はつきにくい．気づかずに粗悪なるものを生産する危険とそのための時間の浪費から解放されるために“知恵”を絞る時ではないか．

1) 地質調査所 海洋地質部